

語学教育研究室での交流を振り返る

河 野 眞

その時にならないと分からないこと、と自分でも不思議な感じがするが、今年度で退職になる。数えると45年間、愛知大学に勤めたことになる。ドイツ語の講師として採用され、さっそく、当時は「外国語研究室」と呼ばれていた部屋へ週に三日か四日は顔を出す日が始まった。豊橋校舎三号館で、建物は今も同じである。そこは語学の関係者のたまり場でもあった。ドイツ語の同僚だけでなく、英語やフランス語や中国語やロシア語の先輩ともよく雑談を交わしていた。先輩には、いろいろなことを教わった。私が独文出身ながら幾らか視野を広げることができたとすれば、語研で専門の異なる先輩と交流する機会がもったことによるところが大きい。

大先輩では、英語の中村喜夫教授は穏やかな英国風の紳士でロレンスが専門だった。千葉孝夫教授はエリザベス朝演劇を手掛け、本邦では未訳ものを次々に刊行しておられた。千葉教授の決してペースの崩れない仕事ぶりは、私には模範となっている。池稔教授は実践的な英語教育の達人で、あこがれの先輩だった。山口啓三教授は英文学が専門で、文学研究の香りを感じさせてくれた先輩だった。山口隆一教授も英米語でその闊達な話術にはしばしば翻弄されるほどで、数場面が濃厚に記憶に残っている。

フランス語の加藤俊夫教授は、今も続く言語学談話会の創設者で、言語学畑ではない私が言語について少し考えるようになったのは影響を受けたのだった。言語学談話会でシェイクスピアの劇中歌について発表したことがある。その後エッセイに仕上げ、数十年後のこの間上梓した『ファウストとシンデレラ』という本に収録した。尾崎昭美教授は、しばらくして文学部の仏文を運営されるようになった。氏とは、ちょうど海外研修が重なったことから、ドイツからフランスへ出かけた折、パリで解禁まもない牡蛎の季節に歓談したことを思い出す。

内田武彦教授からはチャーサーの話をよく聞いたが、日本西洋を問わず映画演劇に詳しく、

また豊かな才気とエンタテイナーの素質の持ち主だった。あるとき「ガマの油売り」を見事に弁じて我々を驚かせたが、それも語研でのことだった。ドイツに海外研修中にロンドンへ出向いたところ、ピカデリー・サーカスで出くわし、奇遇のまま内田教授の滞在先のケンブリッジへ赴いた。内田教授とは、後に一緒に科研の枠で聖者伝説を調べることになった。

清水一嘉教授はイギリスの文藝社会学では名の通った人となってゆかれたが、その研究のすごさが分かったのは、後に社会史的な方面に関心を広げてからだ。中野美智子教授はやがて早稲田大学へ移って英語教育部門のリーダーとして活躍されることになるが、同じ大学の住宅の隣人としてよく行き来していた。他へ転任されたことでは中京大学へ移られた伊藤忠夫教授にはお世話になった。氏の『英語の社会文化史：季節名から文化の深層へ』が刊行されたときの記念パーティーを思い出す。後にカレンダーの東西比較を試みたときに使わせてもらった。また赴任した頃には、やがて学習院大学へ転任される北嶋美雪教授がおられ、一流の学究ながらはなやいだオーラがあった。英語音声学の木村和夫教授や、やはり英語の知念広真教授もよく覚えている。英語の末平協助教授とも語研でよく歓談していた。私が赴任した頃お世話になった方にはまた立命館大学へ転任された佐々木康之教授がおられ、フランス語の辞書づくりに励んでおられた。

イギリス人のアイヴァン・コスビー教授は私とほぼ同じくらいの勤務歴だったが、後輩のアンガス・マッキンドー教授と共に愛知大学の英語教育では欠かせない方々だった。愛知大学がイギリスの大学とはじめて提携協定を結んだのはレディング大学だったが、コスビー教授の努力によるものだった。

現在同じ学部と同僚で英語の分野では、田本健一教授が今は副学長、そして塚本倫久教授が国際コミュニケーション学部長で、いずれも目下大学運営のなかめである。塚本教授のコーパス活用の日本ではじめての英語辞典は目下ベストセラーで英語教育の分野では広く知られているのは近年の快事だろう。

特にお世話になったのは先輩ではフランス語の浜本正文教授がおられ、学術的にも個人的にも、教わることは計り知れないほどである。ご尊父の逝去に際して、同僚諸氏の代理として出身地の山口県周防大島を訪れたことがあった。河原誠三郎助教授はかなり早期に退職されたが、きらりと光る着想のある人だった。同じくフランス語の田川光照教授は、三好校地が勤務地で同校地の活発化するために献身的な活動をされていた。研究会でそのサド研究の一端を知って衝撃を受けたものである。昨年、サドの研究を完成させたいとして定年まで数年を残して退職されたが、そのさい著書と訳書を希望者に配布された。いずれもフランス語の稀書奇本を踏まえており、ビブリオフィリアとしての目の凄さを改めて知ることになった。フランス語ではまたしばらく横張誠教授がおられ、獨協大学へ移られた。スキーには、何度か一緒に出かけたことがあったが、スポーツの腕前は尋常ではなかった。そして誰の後任だっ

た、現在の鈴木秀治教授がフランス語担当として赴任され、後に新学部へともに移った。

同じドイツ語の先輩では新形信和教授は哲学に造詣が深く生き方もいかにも哲人の風があった。新津嗣郎教授はドイツの詩や放送劇に堪能で、竹中克英教授と一緒に何冊も本を出しておられた。竹中教授の方は独文ながら法学部長となって大学行政に重きをなすなか、心労もあったのか早世されたのが惜まれる。愛知大学は三好校地への進出問題をはじめ教職員は何度も難問に直面してきたのである。土屋洋二教授は文学部独文の主任教授として活躍され、門下生にはドイツで仕事をしている人も少なくない。そのドイツ詩の研究は常々自分には師表の一つだった。合田昭三郎助教授は一徹にして人間味が豊かな人で、自分は難しい局面で何度も助けてもらった。安藤良太講師は、自分がドイツへ留学した時の同輩で、図らずも愛知大学で一緒になり、また学部新設では語学関係の科目づくりを担当してくれた。それだけ各国語に通じていたのである。それはまた同氏の純粹さとも一体で、ややあって大学教員の職を辞されたのは残念だった。

ドイツ語ではまた、自分が赴任して数年後に同志社女子大へ転任され玉置保巳教授がおられたが、その後も交流があり豊橋のお宅へよくうかがった。文学部の主任では、私を愛知大学へ採用された板倉軯音教授がおられ、詩人肌としても学内での重みでも見上げるような存在だった。リンゲルナッツの訳詩の評価が高いが、ゲーテの「ライネケ・フックス（狐）」の翻訳（人文書院版『ゲーテ全集』第8巻所収）も日本語が生きている。その後、会津伸教授、岸谷敏子教授がしばらく担当され、やがて一年先輩の土屋洋二教授が主宰された。

印象深い方に藤田美樹志教授がおられた。永く教養部長をつとめ、また単位のまとめ役という以上に大学行政で存在感があった。若いときは学術の方が大事なはずということもあって批判的になったが、後に学部新設にたずさわるに及んで、そういう役目も少し理解できた。そして特に思い出すのは、藤田美樹志教授が加藤俊夫教授と共に、文芸評論家の丸山静氏を特任教授に招聘されたことで、やはり一本筋が通っていたのだ、と感銘を受けたものである。

中国語の今泉潤太郎教授は自分が所属していた教養部の見上げるような先輩で、また愛知大学あげての大事業『中日大辞典』編纂の大黒柱だった。陶山教授は中国語の担当だったが韓国系の方で、自分が国際コミュニケーション学部の責任者の頃、韓国の大学との提携を進めるに当たってずいぶん助けていただいた。一緒にソウルへ出かけたこともある。世宗の諺文の研究があり、今も叢書として朝鮮・韓国語を一般向けに教えておられる。やはり中国語の荒川清秀教授とは長い付き合いだが、今や日本を代表すると中国語学者である。那須雅之助教授は若くして『中国語表現辞典』を手掛けるほどの俊秀だったが、国際コミュニケーション学部創設からしばらくして亡くなった。氏とは大学の業務で北京へ出かけたことがあった。早く亡くなったことでは、英語の佐野俊彦助教授もそうだった。一緒に滋賀県へ他大学の見学へ出かけたことがあった。それに自分が設置にかかわった国際コミュニケーション学部の

名称は、元は佐野助教授のアイデアだったことを後に知ったものである。

六十歳という年齢で亡くなられたロシア語の佐々木秀夫教授のことは忘れられない。教授とは特に親しく付き合いがあり、スキーに誘われて、手ほどきを受けながら毎冬のように長野県の志賀高原や岩岳へ出かけた。八方尾根へも行ったことがある。中世ロシア語の研究書を何冊もいただいたが、自分にはついに歯が立たないでいる。佐々木教授が亡くなられた後を原求作助教授が担当されたが、ややあって上智大学へ転任された。その頃、自分は豊橋語研の室長をしており、折から図書館のなかに入れるという合理化案が出されたが、二人で協力して語研を独立した施設として存続するかたちにしたのだった。現在の名古屋校舎になっても、その形態が引き継がれているのは長期的な観点から語学教育をみると、それがよかったと思っている。

こんな風にあれこれ思い出すと、語学教育研究室は、自分にとって勤務の上でも人間関係の上でも大きな結節点であったことを改めて感じる。思いつくままなので、身近に付き合いながら漏らしている方もあるかも知れない。すでに退職された旧知を中心に綴ったのである。



1980年3月 就業時間後、豊橋外国語研究室において世話人
交代の団欒の席で、佐々木秀夫教授（右）と共に